



Title	過剰睡眠を伴ううつ病患者の睡眠：24時間ポリグラフィ的研究
Author(s)	檜山, 寛市
Citation	大阪大学, 1983, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/33613">https://hdl.handle.net/11094/33613</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed</a> 大阪大学の博士論文について

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名・(本籍)	ひ 檜	やま 山	ひろ 寛	いち 市
学 位 の 種 類	医	学	博	士
学 位 記 番 号	第	6 2 2 1	号	
学 位 授 与 の 日 付	昭 和 58 年 12 月 1 日			
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 5 条第 2 条該当			
学 位 論 文 題 目	過剰睡眠を伴ううつ病患者の睡眠 —24時間ポリグラフィ的研究—			
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 西 村 健			
	(副査) 教 授 垂 井 清 一 郎 教 授 蔡 内 百 治			

## 論 文 内 容 の 要 旨

## (目 的)

過剰睡眠を伴ううつ病の睡眠についての研究は少なく、その成績も一致していない。例えば睡眠量という最も基本的な点についても、それが実際に増加しているという報告と、臥床時間は長いが睡眠量はむしろ減少しているという報告がある。そこで24時間連続ポリグラフィ的記録を行ない、以下の諸点を明らかにしようとした。第1に、うつ病患者で過剰睡眠と見える症状は単なる臥床時間の増加なのか、それとも実際に睡眠時間が延長しているのか。第2に、もし睡眠時間が延長しているとすると、それは一次的に過剰睡眠がおこったのか、それとも二次的に好転の結果もたらされたものか。またその睡眠は、各睡眠段階の割合の変化など質的な変化が認められるかなどの点である。

## (方法ならびに成績)

抑うつ感情や欲動の低下を主症状とするいわゆるうつ状態を相性に呈し、この時期に強い眠気を訴え、臥床時間が延長する患者10名を対象とし、健康成人9名を正常対照群とした。これらの患者群と正常対照群に24時間連続ポリグラフィを用いた検査を施行し、患者群については病相期と寛解期の両期について記録した。検査期間中被験者は無投薬とし、検査当日は原則として終日臥床させた。

1) 睡眠潜時について：入眠潜時は患者の病相期には寛解期や正常対照群と比較して著明に短縮しており、統計的に有意であった。入眠より他の各睡眠段階までの潜時は、寛解期と病相期の間にも病相期と対照群との間にも有意の差は認めなかった。REM潜時についても3者の間に差はみられなかつた。

2) 睡眠量について：24時間の記録に占める睡眠時間の割合は、病相期には寛解期や対照群と比較

して有意に増加していた。この睡眠率を昼間と夜間に分けてみると、夜間の睡眠率は病相期、寛解期および対照群の間に差はなく、昼間の睡眠率が病相期で増加していた。

3) 睡眠の内容について：各睡眠段階が全睡眠に占める割合は、病相期、寛解期および対照群の間に差はみられなかった。REM睡眠は病相期に若干増加していたが、有意の差でなかった。REM睡眠の出現回数は、寛解期に比し病相期に増加していたが、単位時間の睡眠あたりの出現回数は両期の間に差はなかった。睡眠持続性に関する指標としての睡眠段階変化数および24時間の寛醒回数などについては、病相期、寛解期および対照群の間に差はなかった。また単位時間を3秒としたREM密度にも差は認めなかった。

4) 安静覚醒時のアルファ波について：覚醒閉眼時のアルファ波周波数は寛解期の10.2c/sに比し、病相期は9.7c/sで有意に減少していた。

5) 内因性うつ病と心因性うつ病との比較：対象とした10名のうつ病患者は、臨床的に内因性うつ病5名と心因性うつ病5名の2群に分けられた。この2群間で上述の睡眠・覚醒に関する各指標に差があるか否かを検討したが、統計的に有意の差は見られなかった。

#### (総括)

1) 過剰睡眠を伴ううつ病患者の病相期の睡眠は睡眠量の著明な増加がみられたが、質的内容については寛解期や対照群と比し差はなかった。

2) うつ状態では活動性の低下のため終日臥床する傾向があり、このため二次的に睡眠量が増加した可能性がある。本研究では正常対照者にも寛解期の患者にも出来る限り臥床を要請し、その結果臥床時間は病相期、寛解期および正常対照群との間に差がなかった。従って睡眠の量的な増加は好権の結果とは考えられない。

3) 心因性うつ病患者と内因性うつ病患者の間に睡眠の質的、量的な差は認められず、心理機制が過剰睡眠の一次的原因とは考え難い。

4) うつ病の病相期における外界への関心の低下が、入床後短時間での入眠につながり、その結果睡眠量が増加するという可能性がある。しかしこの場合は浅眠の増加や覚醒回数の増加など不安定な睡眠経過を示すと考えられるが、すでに述べたように病相期と寛解期の睡眠の間に質的な差はなく、こうした機序で過剰睡眠を説明することはできない。

5) アルファ波周波数が病相期に減少していることを考えると、過眠を伴ううつ病患者は覚醒時にもその水準が若干低下しており、24時間を通して睡眠への傾向が強いと思われる。

以上のことから病相期の患者群では睡眠をもたらす機序が能動的に亢進していると考えたい。

#### 論文の審査結果の要旨

過剰睡眠を伴ううつ病の睡眠に関する知見は少なく、実際に過剰睡眠が存在するか否かという基本的な点も明らかでない。本研究は強い眠気を訴える内因性および心因性うつ病患者について、病相期と寛

解期に 24 時間連続ポリグラフィ的記録を行い、睡眠、覚醒に関する指標を正常対照群のそれらと比較検討したものである。

その結果、病相期は著明な入眠潜時の短縮と睡眠時間の増加があること、この期間の睡眠は正常睡眠と同質であること、覚醒時アルファ波周波数が減少していることを見い出し、過剰睡眠を伴ううつ病では 24 時間を通して睡眠への強い傾向があることを実証した。

本研究は、うつ病患者の中に睡眠をひきおこす機序が能動的に亢進している一群が存在することを明確にした点で価値があり、学位に値するものと考える。